

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会 ニュースレター

# 太平洋の森から

2012年4月発行  
NO.33号



# 2011年度 「森を守る会」 コアメンバーの活動報告

## 1 清水 靖子

### 1 導入 津波と森と海とのつながり

2012年2月19日の「パプアの森を守る会」の集会で講演をしてくださった畠山重篤さんは、津波と森と海について、次のように語られました。

「私たちは以前から広葉樹を牡蠣のために植えてきましたが、津波以後には、その植えた木々からの滋養で、牡蠣の身が大きく育ち、魚も寄ってくることを体験しました。」



写真はNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」HPから

この体験談は、「パプアの森を守る会」が関わってきたパプアニューギニアやソロモン諸島での、同様の出来事を彷彿させてくれるものでした。

自然災害があろうとも、原生林や広葉樹が豊かである限り、森と川と海は、人智を超える循環に潤されるという事実です。

かつて2007年4月2日にソロモン諸島のウエスタン州を襲った巨大津波では、原生林の滋養に潤される海域での復興は、欧米の科学者の予想をはるかに超えたものとなりました。母なる珊瑚は以前より、いっぱいのお卵を産み放ち、破壊された珊瑚礁に着床させて、豊かなサンゴの花を回復させたのでした。しかも以前よりも多くの魚の群れを引き寄せたということです。それは、母なる自然が、力を振り絞って、あたかも仲間の傷を癒しているかのようでありました。

同年の2007年末に巨大サイクロンに襲われたパプアニューギニアのオロ州ウイアク村では、サイクロンの大激流が山から土砂を押し流し、村も川も壊滅かと思われ

た状況でした。しかし、その後その川べりの湿地からは、蒔いた種からの稲が一年間に3度も収穫できたということです。

### 2 “温暖化”キャンペーンで原発を推進する日本

3.11以後の一年間、私たち「パプアの森を守る会」のメンバーは、原発を止める運動や被災地の救援に全力で関わってきました。

パプアニューギニアの現地の村々とは電話やメールを通して連携をつづけてきました。村々では、後述するように、裁判に勝ち、企業を追い出し、原生林を守っていました。これは皆様の支援のおかげでもあり、このニューズレターに、たっぷりと報告をさせて頂きたいと思い、2010年の訪問とあわせて記しました。

私自身は、3.11直前に発行しましたリーフレット、『原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない！地球上の生命環境にとって最悪の選択』の、作成チームの責任者であったことから、以後、原発についての講演に多忙な日々を過ごしてきました。

注：小出裕章監修のこのリーフレットは現在14万部を発行。2012年3.11には英文の発行に至りました。ご希望の方は03-5632-4444日本カトリック正義と平和協議会へ。英文の注文は03-3202-0372へ  
“温暖化”問題については、小出裕章著「原発のウソ」2011年扶桑社新書。小出裕章講演記録 <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/kouen/JCC100119.pdf> 他を参照ください。

“温暖化”キャンペーンに乗って、政府・電力会社は、原発を推進してきたわけですが、3.11以後の“安全神話”崩壊後は、いっそう執拗に、“温暖化”を口実にした原発推進を画策しています。政府による総合資源エネルギー調査会基本問題委員会は、の記録にも、地球温暖化問題を踏まえた原発政策と、その技術輸出までを述べている状況です。他国への原発輸出によって国内で増設できない原発の利益を得ようとするものです。

### 3 “温暖化”キャンペーンと炭素クレジットが、

原生林をいっそう破壊へ

この“温暖化”を利用したキャンペーンは、実は熱帯雨林地域への炭素貿易・炭素クレジット・REDDとしても利用されてきました。

熱帯雨林の土地囲い込みともいえるべき、アグリカルチャー・リースによる、伐採とモノカルチャーのプランテーション化がそれです。

“炭素貿易”政策は、IPCC（国連気候変動政府間パネル）が京都議定書以来進めてきたもので、CO<sub>2</sub>を出す先進国が、炭素クレジット・カード（CO<sub>2</sub>削減に貢献したとのクレジット）を大金で買い（日本政府も私たちの税金ですすでに購入）、その金がキャンペーン仲介業者を経て、熱帯雨林問題でいえば、パプアニューギニアなどの政府の懐に落ちて、プロジェクト化されるという仕組みです。間に入るコンサルタントと、受け皿の政府が多大な儲けをします。

REDDとは、開発途上国における森林の破壊や劣化を回避し、二酸化炭素の排出を削減しようとするプロジェクト。日本語で、「森林減少・劣化からの温室効果ガス排出削減」と言う。REDDにおいては、オイル・パーム・プランテーション化は、FAO（国連食糧農業機構）によって森を創出したとみなされてしまうのです。これはいっそうの原生林喪失を意味します。

このニューズレターでは説明しきれませんが、多少のご紹介をしたいと思います。

関心のある方はWEBサイトで検索してみてください。

アフリカ、中南米、インドネシアのいくつかの村々では、すでにREDD政策で軍隊を使って住民を土地から追い出し、森の伐採と丸太輸出、伐採後のオイル・パーム・プランテーション化を進める政策が強行されています。反対する住民が殺害・幽閉されたケースなど、多くの問題をはらんできました。

では、パプアニューギニアではどうなのでしょう。

### 4 パプアニューギニアでの“炭素貿易”

腐敗と森の喪失

パプアニューギニアでは、IPCC（国連気候変動政府間パネル）の主導する炭素貿易推進に呼応して、2006年早々に、ソマレ首相の元で、炭素クレジットによる膨大な収入を見込めた受け皿づくりを開始していました。“気候変動と持続可能な環境保全オフィス”（Office of Climate Change & Environment Sustainability (OCC&ES)）がそれです。

予想されていたことですが、初代所長のテオ・ヤサ

ウエ氏は、REDD違法クレジット発行と汚職の発覚で、2009年に停職処分、その後オフィスも裁判所から一時閉鎖の命令が出されました。流入した膨大な炭素クレジットのカネの行き先は不明なままです。

同年11月には“温暖化”キャンペーンを牛耳るIPCC自身の“温暖化”グラフの捏造や、“温暖化”報告書の不正記述が明るみに出て、IPCCへの批判が世界中にひろがり、信頼度は地に落ちてしまったのです。この事件を、クライメイト・ゲイト事件と言いますが、日本ではほとんど報道されず、多くの人々が“温暖化”キャンペーンへの疑問を持つことなく、今に至っています。

実は“温暖化”問題は、きわめて政治的・ビジネス利権の問題として利用されてきたのです。IPCCの創業者のサッチャーによる原発推進、ゴア元大統領の原発利権、その他歴代のIPCC推進者の隠されたビジネス利権がつながっています。

パプアニューギニアは憲法が保障する慣習的土地所有制度の国でありました。しかし、1996年に政府は、企業への99年の土地のリースを許可する土地法を成立させてしまいます。その結果、原生林の土地の“囲い込み”、伐採、オイル・パーム・プランテーション化という事態が、パプアニューギニアで進行していくことになりました。

“温暖化”と絡んだ炭素貿易は、この“囲い込み”を、利用した森の破壊へと連動していきます。またパプアニューギニアでもっとも特徴的なのは、炭素クレジットの膨大なカネが、受け皿の政治家とオフィスに流れ込んで腐敗を産み、カネを目当てに群がるコンサルタント会社の儲けとなって行ったことです。

参照：1

パプアニューギニアでのREDDコンサルタントの膨大な儲け。2009年には、パプア政府のIPCCへ提出するREDD対策の書類づくりに、政府はMcKnosey社を雇いました。しかし同社はREDDの書類づくりに、290万USドルを受領。書類1ページ当たり1万1000USドル（日本円100万円近く）を懐にして、伐採企業を批判することなく、地主たちを森林喪失の犯人に仕上げつつ報告書を書き上げ、その後、姿を消して行きました。IPCCのコンサルタントたちは、他の国でも、こうした莫大な炭素クレジットのカネの受益者でありつづけるのです。

参照：2

オーストラリア政府も、パプアニューギニアの森を守

る炭素クレジットのカネを2億7300ドルも受け取り、パプア政府とのパートナーシップを締結。しかし、そのカネは森を守ることに使われず、伐採を急増させる結果を招いただけでした。

炭素貿易の状況を確認するべく、私は2009年9月1日に、すでに森林省長官（カナウイ・ポウル氏）にインタビューを試みています。

「単なる熱帯雨林伐採では、今や世界の声が納得しないからね、丸太輸出量は増えないよ。地球“温暖化”キャンペーンによる、“炭素貿易クレジット”、あるいは REDD という新しい方法では、エコということで納得がいく。炭素貿易の取引で、多くのカネが政府のもとに入ってくるので大歓迎ですよ。」と堂々と述べたのです。もちろん彼は私の過去の20年間の活動も、私も彼のことも知る仲ですから、気楽に本音も交えて話し合えたのでした。

翌2010年の11月には、森林省のニューブリテン島問題に詳しい現地調査部門の最高責任者との面会をしました。ムクス・トル地域の美しい原生林地帯が、リースされたことを非常に残念がり、「土地省と農業がつるんで、アグリカルチャー・リースをし、環境保全省は、早々に許可を出し、最後に森林省に、“他はぜんぶ許可を出しているよ”と迫り、伐採権を発行させるのです。」と説明してくれました。

## 5 SABL の不正と広大な地域の囲い込みリース

過去最高の伐採量へ

2010年から、政府は国策としての、広大な土地の囲い込み計画ともいえる SABL (スペシャル・アグリカルチャー・ビジネス・リース) 政策を発表し、520万ヘクタール（九州の1.2倍）の土地を99年間の期限で企業にリースを行ってきました。

多くの地主たちは、カヤの外に置かれて、気が付いたら自分たちの土地が SABL に入れられ、伐採企業に渡されていたということが各地で起こり、土地なき地主の増加で、パプアニューギニアの歴史のなかで最大の危機的状況となりました。

この利権を手の中にしてきた中心企業は、アジア最大の伐採企業マレーシアのリンブナン・ヒジャウ社です。変幻自在で賄賂はお手のもの。子会社やボスの名は適当に変貌させ、オイル・パーム・プランテーション化を行う企業もこの系列にあります。（現地の日刊紙 THE NATIONL も、同社が所有し、メディアまでも支配する仕組みです。）

2011年に、現地の NGO はデミアン・アセさんを中心に結束して、SABL に対して批判の声明を発し、国連

による調査の介入を求めました。ついに2011年の3月11日に、国連は、パプアニューギニア政府に調書に答える要求を出すに至りました。その結果、2012年に入つての3月に SABL への調査委員会が結成されました。

現在各リース地域の調査中です。この間、2011年の伐採と丸太輸出量は、過去最高の350万立方メートルに至ってしまったのです。最大の輸出先は重要を急増させる中国で、日本への輸出もつづいています。

(資料)

パプアニューギニアからの丸太輸出量

2006年 270万m<sup>3</sup>

2007年 288万m<sup>3</sup> 政府はアグリカルチャー・リースの方法での伐採権獲得を開始

2008年 126万m<sup>3</sup>

2009年 210万m<sup>3</sup>

2010年 299万m<sup>3</sup> 17%がリース地域から

2011年 350万m<sup>3</sup> 19%がリース地域から

「いいじゃないか、オイル・パームを植えるのだから！」と先進国の人々は簡単に言うかもしれませんが。しかしそれは、実態を知らない人のコメントなのです。もとの原生林は皆伐され、豊かな暮らしは終わり、プランテーションでは農薬・除草剤の噴霧と、大地の貧困化、川と海の汚染、オイル・パームの果実の収穫に仕える労働者と化して暮らしていかなければなりません。



ニューブリテン・パームオイル社の工場

2010年10月撮影

同社は、マレーシア系で、ニューブリテン島を、広大なオイルパーム・プランテーションの王国にしあげました。

## 6 闘う弁護士 デミアン・アセさん

(CELCOR 法律事務所長) の苦悩と勝利  
対策はあるのでしょうか。

このような非常事態のなかで、デミアン・アセさんは、

あらゆる方法で、地主の裁判を支援してきました。首都ポートモレスビーの一角にその CELCOR のオフィスがあります。2010 年の訪問時には、繁華街の雑踏のなかで、辻垣さんともども、フライド・チキンなどを注文しての昼食を共にしました。

「SABL の計画の中に、オロ州のコリンウッド湾の一部、東ニューブリテン州のムクス・トルやジャキノット湾も入れられているのです。」とデミアン・アセさんは嘆き、「パプアの森を守る会」が関わってきた原生林の村々への裁判支援に協力してほしいと語ります。

「政府・企業一体となつての不正への対策としては、地主側が、“不法である”として、すぐに裁判に持ち込んで、企業への一時操業差し止め命令を勝ち取ることです。そうでない所は弱く、企業につけこまれる。この方法が最も地主側に有効な手段です。」

「そのためには、住民側が日頃から、結束していること。支援してくれる NGO や、弁護士との連携を保つておくことが大切です。」と彼は言います。

食い尽くす蟻のように、原生林をめざして、伐採会社は賄賂をばらまき、仲介業者は、その金を懐に、有力者や地主の買収工作にあたるのです。

仲介業者は一部の地主の署名を集めただけで、“これが地主たちの署名簿”だと偽って、土地省、農業省に行き、お目当ての土地の 99 年のリースと操業権を発行させて行きます。この間、多くの地主は何も知らないまま自分の土地が奪われて行くのです。

こうした過程で、企業は突如、ポントゥーン箱船（伐採と埠頭と道路工事機材とクレーンを満載した平底の船）を、お目当ての原生林地域に移動させます。驚く住民を尻目に、現場での工事を強行し、原生林の突貫伐採に進むという方法が展開されます。

伐採企業は私兵としてのポリスを雇い、反対する地主を武器で脅してまわります。森林省からの伐採許可がまだ出ていないとしても、「出ている」とウソをつく。森林省には「後は森林省が伐採権を出せば OK なのです」と迫って伐採権を迫ると言う手口だそうです。

闘うデミアンさんへの嫌がらせか、2011 年はじめには、デミアンさんの CELCOR のオフィスに、何者かが侵入し、書類とコンピューターを、徹底的に破壊して去りました。

しかしそうした脅しにもかかわらず、2011 年 6 月 21 日、デミアンさんと地主側はリンブナン・ヒジャウ社への訴訟で、最高裁による同社への 555,000 キナ（1 キナは日本円で 40 円前後）の賠償金支払い命令を勝ち取ります。

これは、ウエスタン州で操業しているリンブナン・ヒジャウ社の子会社コンコルド・パシフィック社による不法伐採と環境破壊を訴えた 10 年にわたる裁判でした。私は干ばつ俊の 1997 年に、地主と共に干からびた水もない伐採地をまわったことがあります。今回の裁判の勝利に拍手を送りたい気持ちです。しかし、一方で不法に破壊された原生林は戻っても来ず、伐採企業の操業停止も命じられているわけではありません。「裁判は伐採開始以前にすることが大切なのだ」とデミアン・アセさんの持論が私の心に、いつも響いて残っています。

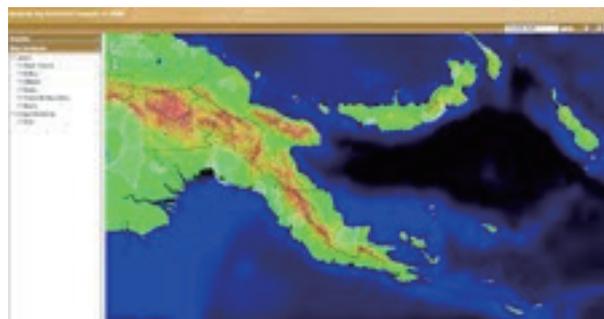
## 7 ジャキノット湾へ

### 原生林のマラクル村への調査訪問

(2010 年 1 月 4 日～ 12 日)

訪問者 辻垣・中村のぶゑ・清水

ニューブリテン島のジャキノット湾にも、巨大箱船は来ていました！ 箱船はジャキノット湾の西方のウヌ川入り江に姿を現し、抵抗するウヌ地域の村人との間に紛争が起きていました。まさに政府発行の SABL 地域に入っている地域です。



SABL 地域は白い線で囲われている。

パプアニューギニア政府作成の図

奇しくも私たちは、その紛争地に向かう伐採業者・政府役人と、同じ飛行機で現地入りしたのです。デミアンさんのスタッフの弁護士が、この紛争の裁判を助けていました。

私たちは到着後、いよいよ、ボートでマラクル村へ向かいました。マラクル村は湾沿いの山壁に島をつくり、奥地にナカナイ山系の原生林を所有して、石灰岩の大地に浸み込んだ地下水の恵みと、豊饒な海の幸に潤された暮らしを営んできました。

ナカナイ山系は貴重な生態系の宝庫としても知られ、新種のフルーツ・バットなども発見されて話題を呼んでいました。



マラクル村のスシ泉

地下水の流れは、湾岸の崖下のスシ泉やイオア川、さらに海底にまで、多数の湧水があり、ジャキノット湾を海の楽園にしていました。夜ともなれば、ホタルの点点滅、満天の星空の涙のような輝きは、この世のものとは思われない美しさでした。私たちは、女性グループのリーダーのマリアさんの準備してくださった、彼女の兄のポール神父の家に泊まりました。ポール神父は東ニューブリテン州全域の教会の責任者で各地を移動していました。

マラクル村の子どもたちと清水



11月5日、私は小学校の校長から、小学校の子どもたちへのスピーチを頼まれましたが、いつもスピーチでは面白くない。代わりに村のリーダーたちと一っしょに即興劇を演じることにしました。内容は、伐採業者からカネをもらっては、村人を買収する仲介業者のストーリーである。結果は大好評でした。普段まじめなリーダーたちの、真に迫った、滑稽な演技に、皆がお腹の皮がよじれるほど、子どもたちも村人たちも笑ったのでした。子どもたちは、お返しにネコとトカゲとサイチョウの話をしてくれました。楽しいひとときで、マラクル村の集いは始まりました。こうした寸劇が好評であることは、マラクル村では伐採への署名が進んでいないことを示していました。

この地域への勧誘にあたっている仲介業者の名前は

ジョン・パルレアという人で、自分が設立したメマロ・ホールディング社を受け皿として、マレーシアのリンブナン・ヒジャウ社を呼んで、ムクス・トル地域での伐採開始をさせようと企んできた人物です。

しかしマラクル村では、地主の長老首長や女性リーダーを始め、強い反対派がおり、伐採への署名は進んでいませんでした。

私たちは、野を越え、丘を登り、村々を回りました。住民は原生林の保存こそマラクル村の未来に重要であるということに一致していましたが、共通の願いは、学校の学費を得る小さな収入でした。

この地域の現金収入のなかでは、ココア豆が有望で、かねてから果実を収穫・乾燥させてラバウルに運んでわずかな収入を得てきました。いわゆるチョコレートの原料となるものです。最近では原生林地帯からの健全なココア豆への需要が高まっていました。

私たちは山道を登り、奥地のケルケレナ村にも赴きました。この村は、前述のジョン・パルレア仲介人の出身村でした。(彼は都市に在住、伐採企業や役人とのおし、村にはいませんでした。こ人々はじっくりと話を聞きあい、率直に話すという雰囲気があり、女性たちも、しっかりと話をしたのは印象的でした。リーダーの一部は、伐採賛成派ではあったものの、長老たちや、女性たちの多くが、伐採反対であり、私たちの訪問は彼らを勇気づけることになったと、後に伝言を受けました。

今回は、辻垣さんが、村じゅうの大人気者となりました。なぜかという、パプアでは、“男たるもの水汲みなんかしない”という風習で、女性たちへの重荷になっている中で、現れた日本の男性が、嬉々として朝な夕な、スシ川泉に降りて、水汲みボトルを丘の宿舎まで運ぶという姿に、村人たちが、いたく感銘を受けたからでした。子どもたちは群がって辻垣さんの水汲みの手伝いをし、辻垣さん待望の、川釣りにも若者が大勢同行しました。



魚を釣った辻垣さん

その成果として、辻垣さんや釣り名人の釣った原生林の滋養の甘い魚を、日々の食卓に頂くという、ラッキーにあずかせて頂いた私たち女性陣だったのです。

今回は楽しみながら村々との交流をし、原生林を守ることの大切さを、深めあった日々でした。失うにはあまりにも美しい、この世にまたとない自然の宝庫マラクル村でありました。

帰路、ラバウルに向かう帰りの飛行機には、例の伐採業者一行と、噂の仲介人、ジョン・パルレアさんと出会うことになりました。もちろんお互いに無言のままでしたが。

彼らはラバウルに着くや、リンブナン・ヒジャウ社出迎への、黒いウインドーの車に吸い込まれるようにして、そそくさと消えていきました。彼らのジャキノット湾入りは紛争地の抑え込みにあったことは明瞭でした。

私たちは最後に、「ココア豆の苗」を買うための「パプアの森を守る会」からの支援として10万円を、「マラクルの森を守るファンド」の口座に、ポール神父と、法律家のフランシス神父に管理を依頼して残して、ラバウルを後にしました。

一年後の2011年12月14日 マラクル村からの情報  
ポール神父からの情報が入りました。

「原生林をしっかり守っていますよ。ココア豆のために、まずは一次産業省の役人を二度呼んで、山の上の村での技術指導をしてもらいました。そのうえで、ココア豆の苗の購入と栽培に入る予定です。」とのことでした。

## 8 激動のコリンウッド湾へ（11月12日～17日）

訪問者 清水靖子

ポートモレスビーから東に原生林の高地や山々を越えようと、コリンウッド湾の北端のトゥフィ飛行場に着きます。ウイアク村からの若者たちがボートで迎えに来てくれましたが、心なしか、その顔に疲れが滲んでいました。「この数ヶ月、コリンウッド湾の原生林を狙う伐採企業との闘いにあけてきたのです。大方私たち住民側の勝利ですが、ワニゲラでの状況は不透明です。今、ワニゲラに、伐採会社の箱船が停泊中ですよ。」とのことでした。

そこからボートでコリンウッド湾沿いに30分ほど南下すると、ワニゲラが見えてきます。伐採企業の巨大箱船が重機材を満載して停泊し、大型クレーンも稼働中でした。これは洋上の工場そのものでありました。船に最大限近寄り周囲をまわって撮影をこころみたのが次の写真です。



ワニゲラに進出した箱船

この企業も、リンブナン・ヒジャウ社配下の伐採企業で、ヴィクトリー・プランテーション社という名前でやってきていました。私の訪問の5カ月前の6月10日に箱船は姿をあらわしており、以来停泊し工事を実行しているのです。表向きは、政府の土地6000ヘクタールへのカシュー・ナッツ植林とすることでしたが、本当の目的は、道路を奥地に延ばし、ポーシオン143という原生林地域を、伐採することにあつたのです。

原生林への伐採に反対するコリンウッド湾あげでの反対が開始されたのは言うまでもないことでした。

以下は住民からの聞き取りです。

## 9 老いも若きも各地から駆けつけ非暴力デモ

「コリンウッド湾各地から、老いも若きもが、ワニゲラ住民への応援に駆けつけ、非暴力の抗議デモを開始しました。」

住民は「企業に“帰れ。二度と戻ってくるな！もしここに戻ったらおまえの身に危険があるぞ！”と口々に叫んだそうです。

これに対して、同社のボスのトニー・ウオンは、反対派住民を鎮めるために、制服姿の“ポリス”（実は企業が雇ったガードマン）4人を送り込んできました。自動小銃を所持させ反対派住民を処罰すると脅してまわったのです。

この後、企業による買収の威力があつたのか、奥地の原生林に隣接するオガヨの共同体は、元代表が伐採賛成派に転身するなど弱体化し、道路づくりのトラックに雇われる若者は収入も得て、反対する家族との間に分裂を生んでいました。

そのため、箱船は何カ月も居座り、奥地へと道路づくりを延ばすことができたのです。今回私の訪問でも、オガヨの住民に元気がありませんでした。

## 10 がんばったシナパの住民 伐採企業を追い出す。

一方コリンウッド湾の中心地でもあるシナパでは、6月17日から、11月12日までの5カ月にわたる抵抗で、仲介業者のサムソン・ジョケと、伐採企業を追い出すに至りました。企業名はリンブナン・ヒジャウ社系のANGアグロ・フォレストリー・マネイジメント社（Hii Eii Sin社長）で、シナパを拠点としてのオイル・パーム計画を要求、ポーション113という奥地の広大な原生林の伐採を狙ってやってきました。

これに対してシナパ、ウイアク、ガンジガ、シネパラ、コイヤシ、ウヴェェなど、いわゆる強い住民組織MAICADの中心9村が結束して、壮烈な抵抗を繰り広げました。

清水到着の2日前の11月12日のシナパでの大集会で、ついに企業伐採企業のスポークスマン自身が、シナパの公衆の前で、仲介業者に次のように罵った後に、去って行くという場面さえあったそうです。

「私たち（伐採企業）は、今まであなたに（仲介人のサムソン・ジョケ）に、2百万キナ以上の大金をつぎ込んできたが、結局無駄に使用して、役に立たなかったではないか！」

企業がカネをばら撒いてきた相手を、公衆の面前で罵ったというのは実に興味深いことです。こんな裏金問題をばらすほど、追い詰められていたのですから。

5か月にわたる村人たちの非暴力武勇伝？の数々を、時にはドラマと滑稽さも交えて私に語ってくれる村人たちの顔には、自信と誇りに輝き、同時に疲れも滲み出ていました。

企業を追い詰めた村人たちの日々を思うときに、私も感慨無量にならざるを得ませんでした。1990年代後半から、村々とMAICADは、何度このような抵抗を繰り返してきたことでしょうか。



背後に女性たちの強い発言と力があつたことは言うまでもありません。サイクロン後の水不足を克服して暮ら

しを営み、タパ（樹皮布）を作り、売り、収入も支える彼女たちは、いつもMAICADのパワーの中心でありつづけています。



大きなタロイモとウイアクの女性

裁判は急遽起こさないと間に合わないということで、今回は首都在住のコリンウッド湾出身者たちが、ジョン・シリゴイ弁護士を中心に、サムソン・ジョケと企業を相手に、4件の裁判を開始していました。

私はジョン・シリゴイ弁護士を訪問して、「パプアの森を守る会」からの支援として、7万円を手渡してきました。

## 11 最後の訪問地ワニゲラのおガヨ

(11月16日)

オガヨでは、前述のように企業に買収されたメンバーもあり、分裂の苦しみにありました。加えてオガヨ伝統の壺づくりも売れ行きが悪く、収入も減っていました。企業による道路づくりは、川の上流まで伸びており、伐採機材からの油と、道路作りのための砂の採取が、かつての美しかったイマラン川を汚染しはじめていました。「ほら、こんな油のかたまりが川底にくっついて、洗濯もできないのよ。」と女たちは嘆くのでした。私は現地に心を残しながら、最後の訪問地を後にしました。



道路づくりをする伐採トラック

## 2 辻垣 正彦

### 共に生きる街

東日本大震災、原発事故、天災と人災が重なった年になりました。お変わりございませんか。今もって復旧も復興も進んでいません。つまらない情報が24時間飛び交い、些細な事は大きく、大事なことは小さく。真実は歪曲され、我田引水的に、都合の良いように原子力マフィアの情報操作によって混乱と不安に市民を陥れています。3年前完成した三春の家（基本設計をお手伝いした）からお母さんの実家のある日野市へ母子2人で避難し、その小学5年生の佳奈ちゃんの文化省での悲しげな、それでいて力強い、「早く父親と一緒に住み、お友達と遊びたいという」要求は何時実現されるのでしょうか。子供達に未来を手渡すはずの我々大人は何をして来たのだろうか。

浪江町の棟梁、桑原道長さんからは「二本松市の仮設住宅に入居した」という葉書が11月末にきました。奥さんと一緒に体育館への緊急避難、土湯温泉のホテルでの仮住まい、今回で3度目の引越になります。毎日、仮設住宅の建設に従事しています。地元の材を使った木造ではなく、鉄骨造の住宅の内装です。5月21日に中野サンプラザでの集会「パプアの森、日本の森」にも、はるばる夫妻で掛けつけ参加してくれました。彼の棟梁としての技術が再び発揮される時は来るのでしょうか。私の設計で、桑原棟梁が仕事した住まいが7年前福島原発に程近い富岡町に建っています。樺の大黒柱と中黒柱を中心に山形、月山の赤松梁を組み込んだ小屋組。継手仕口を主体として、金物に頼らず合板や外材を一切使わない、あの遠藤邸は錠をかけ雨戸を締めて封印されてしまったのでしょうか。田んぼの中に建つ、塔のある家。夜は塔に明かりが付き、灯台のように目印としての役目を果たしていた。あの家は死の街のはずれで、人気無く佇んでいるだけなのでしょう。暗い話が続きました。

明治27年に撮られた、鎌倉の航空写真を見る機会がありました。鶴ヶ岡八幡宮から若宮通りが中央を走り平地が相模湾に扇状に広がっています。廻りは山に囲まれています。今はびっしり住宅や商店が建っていますが、この写真では一面田が広がっているばかりで、人家はまばらです。かつて江戸時代、ここに津波が襲って来たからではないかと想像されます。先人はこの事実を確実に伝え知らせていたのです。戦後この教えを忘れてしまったのでしょうか。

今日の新聞報道によると原発を開発途上国へ売り込む準備をしているという。ヴェトナムやタイ、カンボジアあたりへ原発を売り込むという。広島や長崎で原爆が落とされ苦しみを深く味わった国が、再び原発を54基も建設し跡仕末もできないエネルギー廃棄物を抱えたまま、今、原発の重大事故を起こし日本を破滅に導いたその年に、企業利益のために売りこむとはとんでもない国になったものである。どうしたら良いのか。全く途方に暮れてしまいます。私達1人1人が自分の考えをはっきりと原発マフィア（政・官・財・学・マスコミ）に向かって異議申し立てすることしかないようです。民主主義の中で金を儲けるためなら、倫理や正義の旗を下すどころか捨て去ってしまった、この社会。バックトゥーザフューチャー過去を見詰めながら未来へ。この姿勢を何とか貫きたいと思うこの頃です。

一方、ヨーロッパのEUが危機的状況に陥っていると、金融マフィアは連日かしましくマスコミを使って吠えています。この原因は、ギリシャやイタリア、ポルトガル、スペインなどの金の仕組みにあると言っています。このため、世界経済は回転せず、歯車が1つ欠けただけで動かなくなるらしい。これをグローバリゼーションと云っているから正直良くわからない。事務所旅行で行ったギリシャのマテオラの山の上の修道院で、自ら描いたアイコンを売っていた修道女やミコノス島の人の好いレストランを営む家族の笑顔を想い出します。空気は清涼で、街並は狭く曲りくねった路が続いていますが、楽しく美しく何を食べてもおいしかった。地に足がついた味。ミシュランの星を数えて、おいしいと思い込み、しかもフランス人がタイヤを売るためのガイドブックで食文化を左右される私達は何か滑稽である。大崎や品川の高層ビル群を毎朝見て、何て取り澄ました冷たい建築を多数建ててしまったのだろうかと思ってしまう。道は広くなったが足元が見えない。前述の国々は過去の文化を引きずりながらも、美しく楽しい。2000年前のローマ時代の城壁におおらかに住みついている人々が沢山いるクロアチアもそうだ。

2011年は3回の集会で話をさせて頂きました。5月21日に河合工務店との共催で中野サンプラザで。9月25日、恒例の名古屋 中村教会（私の設計した伝統的木造建築のテーマで訪れました。）での報告会。10月15日、

私の故郷、浜松の浜信相談プラザで「天竜の森とパプアの森」でした。11月5～6日は、浜松からバス仕立て、岐阜県中津川市にある御料林の加子母の森を訪れました。多勢の方々が、森の大切さ、植林は地域の風土に根差したものでなければ、かえって生態系を破壊することなどに耳を傾けて下さいました。本当に、ご支援ありがとうございました。

来年は2月の連続講座が始まります。なほ一層のご支援をお願いします。

私も設計の仕事を通じて、かつての街並や文化をしっかりと見つめ、外材、パプア材、ソロモン材、勿論、ロシア材、チリ材、アフリカ材を使わず、全て国産材で合板を使わず、金物にも頼らず、プレカットではなく、大工の手刻みでしっかり建築していこうと想います。



日本キリスト教団 和泉多摩川教会

### 3 池田 光司

#### 「森を守る会」名古屋報告会のご報告と福島原発事故についての所感

2011年9月25日(日)キリスト教団名古屋中村教会において、「森を守る会」の報告会が開催されました。この教会の会堂は、森を守る会の代表である辻垣正彦氏が設計され、岐阜県加子母村の材を中心に、国産材で建てられた会堂です。そのご縁もあって、一昨年、昨年に引き続いて、今年で3年連続しての報告会開催となりました。

当日は、礼拝の後、会堂でみんなでおにぎりを食べてお昼を済ませ、13時から15時まで報告会が行われました。教会員の方々を中心に20名程度の参加の下、まず辻垣さんから「パプアニューギニアの森と日本の森の今」と題した講演があり、その後、私が「放射能汚染と森林伐採、その違いと共通点」と題した講演を行いました。ともに、写真と資料をプロジェクターでスクリーンに投影しながら話しをしました。

辻垣さんの話しの要点を列挙すると次のようになります。

##### <日本の森の今>

- ・日本の用材自給率の低下(50年前90%→現在20%)
- ・国産材の価格は高くない(30年前の半分で外材より安い)

- ・林業従事者の高齢化
- ・瀕死状態で放置される日本の森(人工林)

- ・30年で壊される日本の住宅
- ・外国人による森林の買い取り

##### <パプアニューギニアの森の今>

- ・美しい原生林と森を守る村の暮らし(マラクル村:豊かな森と水,ホタル,人々の笑顔)

- ・伐採の危険にさらされる村々(村々での集会の様子など)

- ・アグロ・フォレストリー・プロジェクト(伐採企業による470万ヘクタールのリース権・操業権獲得の動き:皆伐→木材収奪→オイルパームプランテーション)

##### <わたしたちにできること>

- ・日本の森の現状を知る
- ・建築の地産・地消
- ・紙の節約
- ・間伐材の利用

- ・エコツアー
- ・オルタートレード
- ・裁判支援

また、東日本大震災とのつながりということで、質疑応答の中で、仮設住宅がプレハブ中心で国産材を使うという発想がなく、湿気を防いで風通しを考えるなど住む人のことに考えは及ばず、日本の森を生かすことにも考えが及ばないことに言及されました。

私の方からは、津波災害の様子（ソロモン諸島と福島）、福島原発事故による放射能汚染の状況、放射能が人体に与える影響、放射能汚染と森林伐採について話しました。みなさん真剣な面持ちで二人の話を聞いてくださり、質問やご意見もあり、あらためて伝える大切さを感じるとともに、自ら話した内容を深く考え直す機会も与えられました。小さな規模の報告会ですが、できれば来年以降も続けていきたいと思っている会です。

さて、普通ですとここで報告は終わりなのですが、少し紙面をお借りして福島原発事故について感じたことを記そうと思います。なぜ、ここで私がそんなことをと思う方もみえると思いますが、次のような状況からです。私は大学時代に原子核工学を学んだということもあって（卒業後は原子力と関係のない仕事に就きましたが）、チェルノブイリ救援・中部というNPOに入り、チェルノブイリ原発事故被災者の支援活動に関わってきました。チェルノブイリ原発事故（1986年4月26日）から25年が経とうとしていたとき、福島原発事故が起きました。いてもたってもいられず、チェルノブイリ救援・中部のメンバーの一員として4月半ばに福島を訪れました。メンバーとともに何ができるかを考え、その後、主に南相馬市を中心に放射能汚染状況の調査、市民団体の立上げ支援などを行っています。メンバーの中には、月に何度も福島を訪れている人がいます。私も月に1回程度訪れています。このような状況の中から、今回の報告会の講演内容を考えるにあたり、福島の支援活動と「森を守る会」の活動を通して様々な意味で“つながり”を考えることの大切さを感じました。その感じたことをここでも記したいと思い、紙面をお借りすることにしました。なお、福島原発事故の被災状況の一部は、チェルノブイリ救援・中部のホームページで確認できます。

福島原発事故による被害と森林伐採による被害には、次のような共通点があります。

- ・自然とともに暮らす人々に被害が出る ・自然を生業とした生活の基盤が崩れる
- ・食と住環境が崩れる ・家族の絆が断ち切られる

- ・コミュニティが対立で崩壊する
- ・生命のつながり（多様性・遺伝）が崩される ・受益者には被害が及ばない

なぜ、このような共通点があるのでしょうか。現在の社会の在り方、経済の在り方を反映しているのではないのでしょうか。自然から離れて、安全と便利さを求める。しかし、その安全と便利さを確保するための道具は、自然を破壊した代償として得られたものです。直接的に自然を破壊するのは、目先の利益を得ようと躍起になって働く人々ですが、その恩恵を受ける私たちも製品を買うということで、現在の社会や経済のシステムの中で自然破壊に加担しています。では、このシステムを変えて自然と共存していくためにはどうしたら良いのでしょうか。私には、難しすぎてよく分からない……。私もそうなのですが、実はここにこそ大きな問題があるのではないのでしょうか。多くの人々にこのシステムの問題が見えなくなっていること、問題が見えたとしても断片的で読み解くには複雑であることが、このシステムが変わらない最大の要因になっていると思います。いろいろな反対運動は必要だと思いますが、このシステムの中の一面や一部をとらえて反対しても、システム自体を大きく変えることは難しいように思います。システム全体をひも解く努力、自らもそのシステムの一員であることを認識する努力、システムの問題がどこにあってその問題を克服するために何をすれば良いかを考え実行する努力が求められているのではないのでしょうか。一つの製品を手にするときに、自然とどんな関わりを持って生まれてきたのか考えること、そこから何か始められるような気がしています。私たちが、システムの中の一員であるがゆえに、システムを変えられる出発点になるように思います。まとまりのない状態ですが、私が福島原発事故に際して感じたことです。



## 2月連続講座 牡蠣の海と森からの声 講師 畠山 重篤さん

2012年2月に東京で開催された連続講座から畠山さんのお話の冒頭部分のみご紹介いたします。

全文は次号のニューズレターに掲載いたします。

みなさんこんにちは。気仙沼からまいりました畠山と申します。

国連に国際森林フォーラムという組織があるのですが、去年は国際森林年という年でした。世界中で森林のことを考える年だったのですが、大震災が起きてしまいましたので、国内での様々なイベントは日本では中止になってしまいました。・・国際森林年に研究者や公務員でない民間人で、森林の保全に貢献している人を世界から5人選ぶ、つまりフォレストヒーローという名前で選ぶ制度がありました。世界中からノミネートされるわけですが、今年は90カ国から90人ノミネートされました。そうしたら、11月ごろに林野庁から電話が来まして、今年の国際森林年の日本代表に漁師のあなたを推薦したいがいかがでしょうかという話がまいりました。私は牡蠣の養殖をやりながら二十数年間、山に木を植えるとか、それから、川の流域の子どもたちを呼んで環境教育をすとかしてききましたので、国内ではそれなりに認められてきましたけれども、世界でという風なことは全く考えてきませんでした。日本の林野庁が漁師の私を選んでくれました。震災復興ということも含まれていたのですが、そういう風を選んでくれてうれしく思いました。・・みなさんは森そのもの、陸の森林そのものを問題にして活躍している方々なんですけれども、私は海で働いている漁師なんですけれども、陸の森林と海そのものは普通でしたら隔絶された世界です。・・私が牡蠣をつくっ

ているという立場から、牡蠣の漁場は全世界、川の水が海にそそぐ淡水と海水が混じりあった海域、汽水域というのですけれども、牡蠣は全世界、ここでつくられているわけです。ですから、その川をさかのぼっていけば、山に行きますから、山が荒れると汽水域が荒れて、結局牡蠣がとれなくなる、というふうなことから、二十数年前から、牡蠣の森を慕う会というのをつくりまして、漁師の私たちが山に木を植えるという、森は海の恋人といいますが、それをずっとつづけてまいりました。・・

やっと我々の二十数年間やってきたことを、国連がそういう視点をもったということがわかりまして、こんなものをかけてもらいましたけれども、感慨ひとしおなものがありました。これはですね、真中に木がありまして、その上に人間のほか森の生き物が描いてあります。ただ、残念ながら牡蠣は描いてありません。これ（金メダル）をデザインするときは、国連はそういう視点をもっていなかったということですね。そこに文句をいってきて、この次から入れますからという話だったんですけど、やっと世界も森林のことを考えるときに海のことも考える時代が来たかなと、いうことを感じました。・・



東日本大震災への対応に追われ、ニューズレターの発行が大幅に遅れ、会員の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。今号より外部印刷にかけての発行となります。使いなれぬソフトと震災後の動向に苛立ちながら、ようやく完成にこぎつけました。会計年度もこのたび4月～3月と変更させていただきます。ご了承ください。

2012年度7月は二度目の連続講座、秋には現地調査を再開いたします。新年度も「森を守る会」へのご理解、ご支援、よろしくお願いいたします。

◎年会費・カンパ受付

郵便振替口座 東京 00100-1-614216 パプアの森  
2012年度（4月～3月） 3000円  
よろしくお願いいたします。

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会  
ニューズレター「太平洋の森から」第33号  
発行 パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会  
〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206  
辻垣建築設計事務所内 電話 03-3492-4245